

統合型動詞表現と分離型動詞表現——日英語の表現形式の相違

日本語と英語は、好まれる表現形式の傾向性においていろいろな違いがあることが知られています。単純な例で考えると、たとえば英語では「家に帰る、帰宅する」と言う場合、次のような動詞句で表現することができます：

(1) come (back) home, go (back) home, get home

これらの表現は、「ある場所から移動して自宅に戻る[到着する]」ということで、主体の**移動・状態変化**を表していますが、この場合もし「歩いて帰る／走って帰る／バスで帰る」などのように**移動の手段**を表現したい場合は、次のような形で表現することができます：

(2) walk (back) home / run (back) home / take the bus (back) home

この場合、日本語に直訳しようとする「家まで歩く／走る／バスに乗る」となりますが、それよりも「歩いて(家)に帰る」などのほうが日本語らしい表現であると感じられるのではないかと思います。英語の walk (back) home と日本語の「歩いて帰る」を比べると、前者は(1)の表現内の動詞である come, go などが walk という別の動詞で置き換わった形になっています。come や go は「(ある方向への)移動」を表し、walk は「その移動の手段」を表すので、この場合「**移動の手段を表す動詞**」を「**移動(そのもの)を表す動詞**」として用いていることになります。他方、後者の日本語の表現は、「帰る」という「移動を表す動詞」はそのまま残し、その手段を表す「歩いて」という動詞の連用形がその修飾要素として付加された形になっています。これはすなわち、「**移動の手段を表す部分**」と「**移動(そのもの)を表す部分**」を分けて表現しているということです。

これらの例からわかるように、「移動・状態変化」をその「手段・様態」を明示して動詞句で表現する場合、英語では一般に、前者に関わる動詞要素と後者に関わる動詞要素を分けずに後者を前者に転用する形で表現する形式が用いられる傾向があるのに対して、日本語では前者の要素はそのまま主動詞として残し、後者の要素は修飾要素として主動詞とは別に表現する形式が一般的です。すなわち、英語では「**移動・状態変化**」と「**手段・様態**」が一体となった統合的な動詞表現が好まれるのに対して、日本語では両者を分離した動詞表現が好まれるということです。他の例も見てください：

(3a) go to work——walk to work / drive to work / bike [cycle] to work

(3b) 職場に行く[出勤する]——歩いて通勤する / 車で通勤する / 自転車で通勤する

(4a) make one's way through the crowd——elbow one's way through the crowd

(4b) 人ごみの中を進んでいく——人ごみの中をひじで押し分けて進んでいく

(5a) make someone awake——shake someone awake

(5b) 人の目を覚まさせる[人を起こす]——人を揺すって(その人の)目を覚まさせる[人を揺すって起こす]

これら(ab)のペアにおいて、(a)の統合的な動詞表現と(b)の分離的な動詞表現の違いは一目瞭然です。次例も参照：

(6a) ride past one's stop——sleep past one's stop

(6b) 降りる駅[停留所]を乗り過ごす——うっかり眠ってしまって降りる駅[停留所]を乗り過ごす

(7a) get the actor off the stage——laugh the actor off the stage (laugh が他動詞で用いられていることに注意)

(7b) その役者を舞台から下ろす——(観客が)その役者の演技を笑った結果、その役者がきまり悪くなって舞台から下りてしまう

上の各例は「移動・状態変化」とその「手段・様態」の表現形式の相違に関するものでしたが、より一般に、「動作・行為」とその「手段・様態」の表現形式についても同様のことが成り立ちます。英語では「動作・行為」とその「手段・様態」が一体となった表現がしばしば用いられるのに対して、日本語では両者は分離して表現されるのが普通です。次例参照：

(8a) laugh——smile / giggle / grin

(8b) 笑う——にっこり笑う / くすくす笑う / (歯を見せて) にやっと笑う

(9a) shine——glitter / glisten / glimmer

(9b) 光る——ぴかぴか[きらきら]光る / (ぬれたものが) きらきら輝く / ちらちら[かすかに]光る

(10a) rain——sprinkle / pour

(10b) 雨が降る——雨がパラパラ降る / ザーザー降る

(11a) express thanks——smile thanks

(11b) 感謝の気持ちを示す——にっこり笑って[にっこり笑うことによって]感謝の気持ちを示す

(12a) express approval——nod approval

(12b) 賛成の意を表す——うなずいて[うなずくことによって]賛成の意を表す

(13a) give Sally a sandwich——throw Sally a sandwich / slip Sally a sandwich

(13b) サリーにサンドイッチをあげる——サリーにサンドイッチを投げて渡す / そっと渡す

(14a) play the part——dress the part

(14b) その役割を果たす——自分の役割にふさわしい[に見合った]服装をすることによって自分の役割を果たす
(この場合は、「自分の役割[地位、仕事内容]にふさわしい服装をする」と言ってもよい)

ここで見てきた「統合型動詞表現」対「分離型動詞表現」という表現形式の違いは、日英語の相違を理解するカギの一つとして重要です。これがわかれば、次のような表現の意味も(たぶん容易に)理解できるはずです：

(15) She shouted herself hoarse. / He ate himself sick. / He drank himself to death.

(16) The worm ate his way through the apple. (Lindstromberg 1997: 31)

日本語と英語のように(系統上関係があるとは限らない)二つの言語を比較・対照して、それらの言語の特徴や性格を明らかにする分野は**対照言語学(contrastive linguistics)**と呼ばれます。対照言語学の研究は言語のさまざまな側面に及んでいますが、いずれも語学の教育・学習への応用という点で有用なものです。